

聞名仁教

第 183 号 毎月発行
(発行日) 2025 年 12 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

老妻と拝む

佐々木蓮磨

紹介しました広瀬守
一老師の晩年と全く
軌を一つにしており
ます。

それから約一週間

臼杵^{うすき}(大分県臼杵市)の
片田舎に足立嘉十郎という
同行がおりました。この人
は若い頃から聞法の志あつ
く、どこのお寺へも法座が
あると聞けば必ず参り、応
分の志を捧げると言った奇
特な同行でありました。

ところが齢八十を超えて
五体ようやく衰え、寺に参
るのもむつかしくなってい
きましたが、家にあっても独
りで念仏を喜んでおったよ
うであります。

昭和三十九年の一月、私
が近所の檀家に参りました
ところ、その家の主人が「嘉
十郎さんも近頃は十分衰弱
が加わり、たべ物を全く受
けつけず、好きな酒ばかり
飲んでいられるそうだから、
もう長くはあるまい」と申
しますので、私も驚いて早
速その足で嘉十郎さんの病
床を訪ねたのであります。

ところが、この人は日頃か
ら地声が大きいので、その
家に入ると大きな声で念仏
しておられるから、この調
子ならまだ大丈夫だろうと
思つて、枕辺に行きました
ところ、大層喜んで「ご院
主さん！よう訪ねて下さい
ました。私には仏様がおい
でて下さったように思われ
ます」と言つて合掌される
ので、思わず私も合掌させ
られたのであります。

そこで私は「嘉十郎さん！
ありがたいな！こんどは死
ぬのでない参らせてもらう
のだから」と申しますと、
彼が言われるには「ご院主
さん！私は今から仏さまに
取りまかれていくようです。
毎日世話してくれる婆さん
も、嫁も仏様のように拝ま
れます。ことに近頃は食物
がノドを通らぬので好きな
酒ばかりを飲んでいますが、
その酒のおいしいことは、

全くお浄土で頂く百味の飲
食かと思われるくらいです。
そこで一升ビンを枕辺にお
いて、退屈すると一杯のん
では念仏を喜ばせていただ
いております」と申される
ので、私も彼の法悦に同調
して念仏しておりましたと
ころ、婆さんがそばに来て
言われるには、「ご院主さ
ん！爺さんは近頃ごろ人間
が変わつてきたようで、な
んだか気持が悪いくらいで
す」と前置きをして「いま
では何か用事があると、あ
の大きな声で婆々と呼んで
いたのですが、この頃は、
まことに気がやさしくなつ
て、お婆さん！と呼ぶよう
になり、子供や孫に対して
も(〇〇さん)と呼び、(あ
りがとう、ありがとう)と
喜ぶので、もう死期が近づ
いたのではないかと案じ
ております云々」と。

この姿は前にもこの欄で

のち、遂に往生されたの
でありましたが、葬式の晩
には、子供達が集まつて言
うには、「お父さんはどう考
えても死んだように思われ
ない。あの死ぬときの様子
というものが、何らの淋し
さも見えず、ちょうど子供
が他所へお客にでも行くと
きのような喜びようで死ん
で行かれたから、今頃はお
そらく結構な世界で喜んで
おるに違いない。われわれ
も亡き父を祝福して、お父
さんが好きであつた酒を飲
もうではないか」と言つて、
兄弟が喜びつつ酒を飲み交
わしたということ。ち
よつと聞くと非礼のよう
でもあります。念仏者の死
は、こうした朗らかなもの
ではないでしょうか。

(了)

清沢満之先生に学ぶ⑧

無限他力、何の処にかある。自分の稟受において之を見る。自分の稟受は無限他力の表顕なり。之を尊び之を重んじ、以て如来の大恩を感謝せよ。

然るに、自分の内に足るを求めずして、外物を追い、他人に従い、以て己を充たさんとす。転倒にあらずや。

外物を追うは貪欲の源なり。他人に従うは瞋恚の源なり。

この清沢満之師（真宗大谷派の高僧）の言葉のお心を伺いたいと思います。明治時代の文章ですので、少し読みにくいですが、まず「無限他力、何の処にかある。自分の稟受において之を見る」という「無限他力」とは如来のお力いわゆる如来の働きのことです。阿弥陀如来の本質は寿命無量を本体として、そこから光明無量の救いの働き（本願力）

といわれるので
す。
「稟受」とは
言ってみれば

が出てくるのですが、この無限他力は寿命無量のはたらきです。はかりなきいのちの働き、それがどこに働いているかという、全世界に働き、万物に働いています。一番身近には「自分の稟受において、無限他力は働いているではないか」と清沢師は言われるのです。今日、私たちは「阿弥陀仏は本当にいるのか、いるとすればどこにいるのか」という素朴な疑問をもっています。現代では「神も仏もあるものか」という人が結構います。要するに「仏（如来）」といっても架空の話ではないか」と思っているのです。

ところが清沢師は「仏（阿弥陀仏）は極めて身近に働いているではないか」というのです。「ではどこに」と問うと「自分の稟受をよく見よ、そこに厳然としてはたらいっているではないか」

「身体」ということです。稟受という言葉は、「うまれつきもらいうけたもの」という意味ですから、それはこの我が「身」のことです。今ここに於いて生きているこの身のことです。今ここに身があり、この身体を成り立たせているはかりないいのち（如来）があるではないか、といわれるのです。実際、この身体は自分が造ったものではなく、大自然のいのちからいただいたものであり、大自然のいのちの働きによつて生き、身体として動いています。目が物を見、耳で音を聞き、鼻で香りを嗅ぎ、口は談論し、心臓や肺臓が動き、胃腸で物を消化し、手足で物を取り扱う。そして心が一瞬一瞬動いているなど、数え切れないほどの働きをしています。ですが、どれも自我（自分）で造ったり動かしたりしている物は一つありません。皆、いのち自身（如来）の

働きの表れです。それをここで「自分の稟受は無限他力の表顕なり」といわれるのです。こういう事は中国唐の時代（9C）の禅の巨匠であった臨済禅師もいっています。

「心法無形、十方に通貫す。眼に在つては見と曰い、耳に在つては聞と曰い、鼻に在つては香を嗅ぎ、口に在つては談論し、手に在つては執捉し、足に在つては運奔す」（「臨済録」）。

ここで「心法」とは無形無色のいのちそのものの働きのことです。ちなみに同じ臨済録の中で禅師は、

「赤肉団上に、一無位の真人有り、常に汝等諸人の面門より出入す。未だ証拠せざる者は看よ、看よ」（朝比奈宗源師訳―この赤肉団上に、

一無位の真人がいて、常にお前たちの面門を出たり入ったりしている。まだこの真人を見届けていない者は、さあ看よ、さあ看よ）

といっています。清沢師が「無限他力、何の処にかある。自分の稟受において之を見よ」というのと同じです。「赤肉」とはこの身体、

「一無位の真人」とは仏（如来）「面門」とは全器官のはたらき、「証拠」は分かることです。

こういうわけで阿弥陀如来の働きを知りたかったら一番手近には自分の身体をよく見よといわれ、この身体の働きとしてはかりなきいのちが働いているではないかと、清沢師は非常に身近なところに如来の働きを見ておられるのです。ということは私たちは阿弥陀如来の働きを離れて一瞬も生きてはいないし、阿弥陀如来の働きによつて私たちは存在せしめられているのです。「仏はいらない」という人は「私はいのちはいらない」と言っているのと同じです。

しかもこの我が身はそれだけでポツンと存在できているのではなくて、我が身以外のあらゆる働きにおいて「身は生きることができているのです」。我が身以外とは、空気であり太陽であり大地であり、お米であり、お水であり、家であり、衣

服であり、親であり、祖先であります。そうした様々な縁によって生きているのですから、まさに私たちは「生かされているのです」。

無数の縁とその働きとなつて働いているいのちそのもの、それを一言でいえば寿命無量であり、阿弥陀如来であります。「阿弥陀如来のお働きで生かされているのです」。別に難しいことではなくて、実に当然なことであり、そして有難いことなのです。それゆえ「之を尊び之を重んじ、以て如来の大恩を感謝せよ。」といわれるのです。

しかし一方、私たちは煩惱を起こし、利己的な生き方をし、罵ったり嘘を言ったり、へつらったり差別したりという罪を犯しています。ですので煩惱具足の凡夫とか罪悪深重の身などといわれています。そうすると「罪の身」ということと「如来のいのちの外にない身」ということと矛盾しているように思います。これはどうなのかという疑問が湧いてきます。

湧いてきます。

実は聖者でも凡夫でも、善人でも悪人でも、男でも女でも、親鸞でもヒットラーでも、いや人間だけでなく牛でも猫でも、生き物でも生き物でないものでも、それぞれの存在はその存在を存在たらしめている働き、つまり寿命無量のはかりない働きによって存在せしめられているのです。

現代の悪人の代表といわれるようなヒットラーでも寿命無量の阿弥陀仏の働きがなければ存在することはできません。その人の善悪・賢愚の性質や才能の有無に関係なく、大いなるいのちの働きにおいて生きていくのです。ただそういういのちによって存在せしめられている、その上でその人が「どういう判断をし、どういう行動を選び、何を為すか」は一人一人の自由であり同時に責任です。善を為すか悪を為すか、正確な判断をするか誤った判断をするかという行いの責任は一人一人の責任です。その行い（身口意の業）によつて、その人の生活の在り方が変わり、それが集団になりますとそれぞれの国家の違いになり、世界の状態が変わります。自然環境が悪化するのもそこから起こってきます。

いのです。これを親鸞聖人は「摂取不捨の真理」といっています。

ただ問題は、この真理を見失い、私たちは自分自身を「個々別々で、私は私自身によって存在している。あなたとは私は別物だ」というように個別的・孤立的に考え、いのちを「我が物」の如くに所有化しています。それが迷いの凡夫の有様です。そこから煩惱を起こし、罪を重ね、苦しみを重ねてきているのです。

このように姿を清沢師は

「然るに、自分の内に足を求めずして、外物を追い、他人に従い、以て己を充たさんとす。転倒にあらずや。」

「父（神）は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」とイエスがいつているのはこのことです。（善人だから生かす、悪人だから生かさない）などということはありません。まったく平等に生かされているのです。そういう有限な個々のいのちの根源が阿弥陀如来のいのちのはたらきです。そういう意味で阿弥陀仏を離れて人（万物）は存在していません。

全体に不足感が起こるのです。そうして何とか「もの足りよう」「満足したい」となるのですが、その満足を阿弥陀仏に求めなくて、外の方に求め出すのです。お金とか名誉とか権力とか、もろもろの娯楽とかに求める。それを自分の「内に足を求めずして外物を追い」といわれるのです。また他者（親族を含め）を自分の支えにしようと、他者に過度に欲求する、それを「他人に従い」といわれるのです。このようにして「以て己を充たさんと」しているのですから、そういう生き方を「転倒」した生き方だといわれるのです。今ここで既に与えられている阿弥陀仏と離れない（いのちの真実）を求めなくて、それ以外のこの世の善きもの、楽しいもの、都合のいいもので己を充たそうとしているのを「転倒」といわれるのです。

外物を追うは食欲の源なり。他人に従うは瞋恚の源なり。」といっているのです。「自分の内に足を求めず」というのは、自分の内とは、自分は阿弥陀仏によって生かされていて、阿弥陀仏を離れず、阿弥陀仏が自分のいのちの主であることと知らないから、自分のいのちが空虚になり、人生の

このように外物への欲求と依存が（強く）なると、「あれがほしい、これがほしい」となつて食欲な生き方にな

信心夜話

哲学者の西田幾太郎博士
の有名な歌に

我心深き底あり

喜も憂の波も

とどかじと思ふ

他者に対して「あの人は冷たい」「あいつは恩知らずだ」「彼は自己中だ」などと怒ったり非難したりで、人に対して「瞋恚（いかり）」が当然起こってくるのです。

そこで自分が人生に本当に満足を求め充実を求めるなら、それを如来に先ず求めよとお勧めくださるのです。

しかもその如来は今個々の人にちゃんとすでに与えられているのです。ただそれを知らないだけなのです。それを言葉によって知らせ気づかせてくださる働きが「南無阿弥陀仏」の言葉であり仰せでありお念仏なのです。

（如来の働きの「働き」は「用き」という言葉がふさわしいのですが、読みずらいので「働き」にしました）

こう書いている私においても、真宗にであつた生活といひながら、日々は喜びもあるが大なり小なり不安や心配事の憂いは少なくな。その点では念仏生活といひても一般の人となら変わりがない。ただ、博士がここで悲喜の心の波の状

態ではあつても「深き底あり」といわれている。この悲喜苦楽の届かない「底がある」ということ、これを知らせていただく。念仏生活といひてもそれだけであるともいえる。これだけであるが、不安や憂いの煩悩の波はいかほど起これども、「ここからは絶対に落ちない大地」いわゆる撰取不捨のいのちの大地があることをお念仏はそのつど知らせてくださる。このお知らせの念仏が道であり、光であり、救いである。正信偈に「不断煩惱得涅槃」という一句があるが、この解釈には、この世で煩惱はありながら、煩惱のまま救われて、死して浄土に生まれて涅槃を得るという解釈もある。それも有難いが、今この世の、煩惱だらけの日々の生活の中で、悲喜苦楽の煩惱があるままで、我が身に離れず、私の底で私をつかみ、私を引き受け、一瞬一瞬運んでくださっている大いなる大悲のいのちましますことを、この一句は告げているといただく。

《住職雑感》

この十一月にHさん母子が東本願寺の「おみがき奉仕団」に参加されました。一泊二日本山に泊まりがけで過ごし、朝は御影堂での勤行、同朋会館での法話座談、そしてメインの仏具のおみがき奉仕をされました。本山の仏具は非常に大きく、しかも沢山有りますのでそれを磨くことは大変ですが、全国から沢山のご門徒が参加されてこなされるのです。家に帰られてから寺に電話があり、「先日のおみがき奉仕団は大変良かったので十二月の御すす払い奉仕団にも参加したい」と希望されました。私などは何度も本山には泊まりがけで行きましたので、それほど感銘す

ることはなくなりましたが、初めての方にはとても感動的な出来事だと思います。毎年、こうした奉仕団参加の募集がありますので、これはだれでも、一人でも参加できます。ご希望のある方はおつしやつてください。

現在の東本願寺（真宗大谷派本山）の御門首（住職）は大谷暢裕門首です。ブラジルの縁が深いお方で、英語の外にポルトガル語も話せる工学にも詳しいお方です。毎日の朝のお勤めに出仕（参列）されて皆様と一生に勤行をなさいます。

なお跡継ぎの新門様は門首のご子息の大谷裕師です。

（了）

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日（月）午後二時始

講師

滋賀県

瓜生崇先生

*なお同日十二月二十一日は午前十時より勤行・法話（念佛寺住職）があります。ご自由にお参りください。